

サンディエゴ日本人教会トピックス

【2019年4月特別号 十字架上の七言】

4月19日（金）午後7時より、サンディエゴ教会では、日英合同のグッドフライデー礼拝がもたれました。この礼拝では7人の方々によるイエス様の十字架での最後の言葉をシェアしていただきました。

今回は次のお二人の方々のお証を掲載させていただきます。

川久浩一兄、コラネリ美佐子姉

1. 川久浩一兄

「わが神、わが神、どうして、わたしをお見捨てになったのですか」

マタイの福音書27章45節、46節

『さて昼の12時から地上の全面が暗くなって3時に及んだ。そして3時ころに、イエスは大声で叫んで「エリ、エリ。レマ、サバクタニ」といわれた。それは、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」という意味である』

今 私たちは、驚くべき言葉に直面します。それが「わが神、わが神、どうして、わたしをお見捨てになったのですか」という言葉です。しかもこの言葉をイエスさまは、死を目前にし、息絶え絶えの衰弱しきった肉体のなかで、大声で叫ばれました。今まで「父」、あるいは「わが父」と呼んでいた、神を、父ではなく、「わが神、わが神」と呼んでいるのです。十字架のみ言葉の一番目は「父よ」で始まり、最後7番目も「父よ」と呼びかけているのにです。そして、「神に見捨てられた」と言っているのです。いったい、イエスさまに何がおきたのでしょうか。

十字架にかかったのが朝の9時。12時になって暗くなり、3時まで、暗黒と沈黙の時が流れます。この暗闇のなかの3時間、一体、何が起きていたのでしょうか。

アモス書 8章9節から10節

『主なる神は言われる。「その日には、私は真昼に太陽を沈ませ、白昼に地を暗くし、あなた方の祭りを、嘆きに変わらせる。その日を、ひとり子を失った、喪中のようにし、その終わりを、にがい日のようにする」』

そう、その日とは、神によるさばきの時。まさしく、今 神による最後の審判が始まっているのです。イスラエルの民、ポンテオピラト、そしてイエスを裏切った12弟子たちが、裁かれるはずでした。いえ、この地球上で清く、けがれのないかたは、ただ一人です。人類すべてが裁かれるはずでした。この時、世界が終わるはずだった。しかし終わらなかつた。イエスさまが、代わりに神の裁きを受けて下さったからです。

イエスが「神の栄えある愛を受ける、従順な存在であると同時に、私達全人類の不従順、罪を完全に受け止める存在」でもあったのです。

始めに言葉があった。言葉は神とともにあった。この世が生まれるまえから、常に神とともにあった、イエス。神はそのイエスとの霊的なつながりを、断ち切ったのです。神を見失い、神に捨てられ、神の審判を受ける苦悶と絶望の叫び。それが「わが神、わが神、どうして、わたしをお見捨てになったのですか」なのです。しかし、これで終わりではありません。

詩篇22編1節は「わが神、わが神、なにゆえ私を捨てるのですか」と始まりますが、24節では「まことに、主は悩むものの悩みを、さげすむ事なく、いとうことなく、み顔を隠されもしなかつた。むしろ、彼が、助けを叫び求めたとき、聞いてくださった」。イエスは、「あなたは私に答えてくださいます」。という確信を貫いたのです。このイエスの真実、イエスの信仰が、神と人との本来の関係を回復させたのです。

最後にコロサイ人への手紙 第1章16節-23節を読んで終わりたいと思います。

『御子は見えない神の形であって、すべての造られたものに先立って生まれたかたである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼によって成り立っている。そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼ははじめのものであり、死人のなかから、最初に生まれた方である。そして、その十字架の血によって、平和を作り、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく彼によって、ご自分と和解させてくださったのである。あなたがたも、かつては、悪い行いをして、神からはなれ、心のなかで、神と敵対していた。しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死を通して、あなた方を神と和解させ、あなた方を聖なる、傷のない、責められるところのない者として、み前に立たして下さったのである。ただし、あなたがたは、ゆるぐことなく、しっかりと、信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから、移り行くことの、ないように、すべきである』 アーメン

2. コラネリ美佐子姉 『すべてが終わった。』

ヨハネの福音書 19章30節

『すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。』

このみ言を頂いて思いめぐらしていた時、思い出したことがありました。

今から四、五年前のことです。絵画が好きな私は、ある日、バルボアパークの美術館へ出かけました。館内は、幾つかの展示室に分かれていて、その一室には、中世の絵画が展示されていました。



ほとんどが宗教画で、中には畳3畳ほどもある
レンブラントの「放蕩息子の帰還」がありました。

見るからに哀れな姿でひざまづく弟息子を、温かい眼差しでいたわり抱えようとする父の姿、その脇には厳しい面持ちの兄息子らしき人物がありました。私は多くの人と一緒にしばらく立ち止まり、イエスさまのお話を重ねながら鑑賞していました。この、巨匠の手による華やかでもある絵画は、繊細で、色彩や明暗の強調も見る者を圧倒し感嘆させるものでした。

その後、数枚の絵を眺めながら進んで部屋の角を曲がると、豪華な絵画が並ぶ展示室の中で、まるで場違いのような一枚の小さな絵の前に来ました。それには、「神の小羊」というタイトルが付いていて、私はそこで釘付けになってしまいました。



忘れられたように誰も立ち止まらないこの絵は、私の手で楽に壁から外せるほど小さく、少し茶色がかったところがある昔の白黒写真のような印象を与える油絵で、そこには四つ足を縛られた小羊が、黒い台の上に横たわっており、その頭の近くには血を入れる器が鈍い光を放っています。それだけです。周りの暗さの中で、これから起きようとしていることを全て知りながら、小羊は、白いその身を委ねているかようです。その姿に、私の罪の贖いのため、すすんで十字架にかかれたイエス様を見る思いがして、私は、胸がいっぱいになり涙が溢れました。その日まで私はこの絵を知らなかったが、1600年代に、スペイン人の画家、フランシスコ・デ・スルバランによって描かれたものでし

た。いつまでもそこに立っていたい私でしたが、ようやく先に進み、その展示室を出る前に再び戻りその絵を心に深く収め、美術館を後にしました。

ゴルゴタの丘の、あの十字架の上で、「すべてが終わった。」と言われた時、イエス様はどんな思いを込めて言われたのでしょうか。

思えば、最初の人、造られてから間もなく罪をおかし、その時エデンの園で神さまが言われた罪の贖いのご計画が、私の想像を絶するイエス様の苦しみと十字架の死によって、ここで成就したのでした。

イエス様は神の御子、栄光あるお方です。それなのに、人間となられ、喜びや悲しみ、飢えや悪魔の誘惑も体験され、世の不条理に怒り、愛する人との死の別れに涙され、そして、十字架の死までもすすんで受けられました。その結果、益を受けるのはこの私です。なぜそこまでこの私のために…私の中には、それに値するものは何一つ見つからないのです。

それゆえ私には、理由は私にあるというより、むしろ神様にあるのではないかと思えてくるのです。御父と御子は、時が始まる前、地の基が据えられる前から、愛をもって人を覚えておれたのではないのでしょうか。

神様は、深い愛と喜びをもって、土をこね、命の息を鼻に吹き込まれ、最初の人、アダムを、神の形に生きるものとされました。それは、神様の栄光があらわされるためでした。そして神様は、この私をも、詩篇139で言われているように、母の體の中で精密に組み立ててくださいました。

それなのに、罪ゆえに、義なる神様の元を離れることになりました。

そのようなことを知らずに、以前私も、神様に背を向けて生きていました。ましてや、神様をもとめることなど、思いもよりませんでした。しかし、神様の憐れみは、そんな私が神様との親しい交わりを取り戻すことを望まれて、20

00年も前に、私には成し得ない和解の道を備えてくださっていたのでした。なんという、絶えることなき神様の愛、なんという真実なのでしょう。

先日、私は孫たちに、イエス様が十字架で死なれた日をグッドフライデーと呼ぶけれど、死が良くないことなら、なぜ、グッドフライデー、良き金曜日と呼ぶのかと尋ねました。彼らはしばらく考えて、それは、イースターが来るからと答えました。子供たちは素直で嬉しいですね。確かに、私たちがイエス様の復活を祝うイースターは、必ずグッドフライデーの後に来ます。この時、私は孫たちに、簡単に、私たちのためにイエス様が十字架にかかれたことを語って聞かせました。彼らはそれを知って喜んでいました。そして私は思いました。私たちにとって、明らかにグッドなフライデーは、神様にとってグッドだったのかしらと。

神様は、はじめに天地万物を創造された時、日ごとにその御業を、「良し・グッド」と言われました。そして、アダムのためにエバを造られた時は、はなはだ良かったとも言われました。

私たちの罪の贖い、神様の究極の愛の御業は、罪のないイエス様の十字架上の死の苦しみと、完璧に結ばれていた天の父と御子の断絶という、この上ない大きな代価が支払われて、「すべてが終わった。」、ここに成就しました。

この時、イザヤ53：11から、我が主、我が神は、すべて良しと、御父と共に篤い思いをもって言われたのではないのでしょうか。

この一方的な恵みによって、一人の罪人が悔い改めるたびに、天において天使たちは喜び、神様をたたえて、ハレルヤ大合唱をすることでしょう。

そして私は、地において喜び、神様をたたえて、心からの感謝と賛美をささげます。アーメン

ラッドとし子